

令和3年10月号



治承4年(1180)の源頼朝

「1147~99」の挙兵は、広常の運命を大きく変えることとなります。頼朝の挙兵を成功づけたのは広常が味方したからだとも評価されている通り、広常が平氏に付いていた場合、おそらく鎌倉幕府は成立していなかったでしょう。当時、上総氏は源氏の力を必要としないほどの圧倒的な軍事力を有していたといわれています。なぜ広常は頼朝に味方したのでしょうか。これまでのコラムでも書いてきた通り、もともと上総氏は源氏と関係の深い一族でした。頼朝はかつて上総氏が頼りにした義朝の子であり、その関係はこの要因といえます。

そもそもこの要因は、広常と平氏の関係があまり良くなかったとみられることにあります。対立関係にあった兄・常茂が平氏を頼っており、さらに治承3年(1179)には平氏の有力家人(家来)であった伊藤忠清(???)1185(が平氏)によって「上総介」に任じられました。これは平氏が広常を上総国の支配者だと認めていなかった

ことを示唆しています。軍記物『平家物語』にはこれに対して陳弁のために京都へ上洛した広常の嫡子・能常(よしつね)が平氏によって禁獄(拘束)されたこと記されています。

このように、広常は平氏に不満を抱いており、平氏に付くという選択肢はあまりなかったのではないかと思われまます。広常は頼朝に与すること、一族間の争いに終止符をうち、自らの立場を盤石のものにしようとしていたのではないのでしょうか。

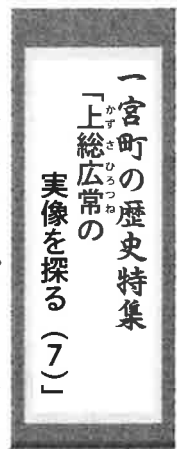
頼朝にとつては東国平定・平氏打倒のために、上総氏の助力は極めて重要なことでした。一方で広常にとつても現状打破のために、頼朝は必要な存在でした。このようにお互いの利害が一致したことで、頼朝の挙兵は成功に導かれることになったのです。



▲伝上総広常屋敷跡  
神奈川県鎌倉市十二所、2018年10月筆者撮影。朝比奈切通入口付近にある

【問合せ】教育課 (学芸員) 江澤一樹 ☎(42) 1416

令和3年11月号



広常の最も有名なエピソードは源頼朝

の挙兵時に遅参したとされていることではないのでしょうか。これは鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』に記載されているのですが、今回はそのエピソードを見ていきましょう。

治承4年(1180)、京都にて以仁王(1151~80)が平氏打倒のために挙兵、全国の源氏に挙兵を呼びかけます。以仁王は討死しますが、挙兵の令旨(皇太子の命令文書)を受け取った頼朝は8月中旬に伊豆国(静岡県)で挙兵します。

その後石橋山の戦いで頼朝は平氏に敗北、8月末には安房国へ逃れます。そこで頼朝は上総氏、千葉氏に協力を依頼します。千葉氏はすぐに参陣しますが、広常は「千葉常胤と相談して参陣する」と答えず、くには参陣せず、頼朝が千葉氏らを率い、武蔵国(東京都ほか)の隅田川に至ったところで2万騎の軍勢を率いて参陣しました。広常は二箇の存念(協力するか、場合によってはその場で頼朝を討ち取るか)をもつて参陣しましたが、頼朝から遅参したことに対して叱責を受けます(大軍を率いてきたので称賛されると広常は思っていました。そのような毅然とした頼朝の態度に広常は心を変え協力することになりました。

前回も書いたように、これまでの背景を考えると、広常が源氏につくことを躊躇したとは考えづらい、といえます。ましてや常胤と相談してから、というのも当時の千葉氏と上総氏の勢力関係(上総氏が圧倒的優位)を考慮しても難しいのではないのでしょうか。

そのことが記されている『吾妻鏡』という史料の性格を考えてみましょう。この史料は幕府が作った歴史書です。すなわち、幕府に反抗的な、都合の悪い人物や事象は事実を歪曲して記す可能性を考慮しなくてははいけません。広常はこの頼朝に謀叛心を抱いたとして誅殺されているので、『吾妻鏡』では広常のことをあまり良く書かない傾向が見られます。

すなわちこの『吾妻鏡』の記述を鵜呑みにすることは危険性をはらんでいるということになります。では事実はどうだったのか。他の史料とも照らし合わせながら考える必要がありますが、紙幅が尽きたので、その話は次回としましょう。



▲戦前の玉前神社(絵葉書、町教委所蔵)  
広常は玉前神社を中心とした玉前荘を拠点としていた。なお、広常の時代の玉前神社は別の場所にあったと思われる。

【問合せ】教育課 (学芸員) 江澤一樹 ☎(42) 1416